

## 仮想的対人葛藤場面における対人交渉方略に信頼感が与える影響

小嶋 佳子\* 加藤 由華\*\*

\*学校教育講座 (心理学)

\*\*豊橋元町病院

### The Effect of Trust on Interpersonal Negotiation Strategies in Hypothetical Interpersonal Conflict Situations

Yoshiko KOJIMA\* and Yuka KATO\*\*

*Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

私たちは、日常生活の中で様々な他者に出会う。他者とのかかわり合いの中で互いの意見や要求、考え方などに相違が生じることも少なくない。こうした相違を原因として、対人葛藤が生じると考えられる(大西, 2003)。大淵(1996)は、対人葛藤を“個人の行動、感情、願望、期待が他者によって妨害された状態”(p. 115)と定義している。

こうした対人葛藤状況における社会的問題解決のプロセスを説明する上で、発達面を考慮したモデルとしてSelmanのINS (interpersonal negotiation strategies: 対人交渉方略) モデルがある (Selman, Beardslee, Shultz, Krupa & Podorefsky, 1986; Yeates & Selman, 1989)。INSモデルは、社会的問題解決のプロセスをステップ1から4に分けている。ステップ1の“問題の定義”において、対人葛藤の状況を適切に定義し、次のステップ2の“方略の産出”では、葛藤を解決するための方略を考える。そして、ステップ3の“方略の選択と実行”において、複数の方略の中からその状況で一番妥当な方略を選び、実行する。最後のステップ4の“結果の評価”では、方略によって生じた結果を評価する。これらの各ステップにおいて、社会的視点取得能力の発達段階に基づいた発達レベルが設定されている。最も低い段階のレベル0は“自己中心的で自他の視点が未分化な段階”である。レベル1は“自他の視点は分化するが主観的な段階”，レベル2は“自己内省的に相手の立場に立つことで自他を互惠的に捉える段階”である。そして最も高いレベル3は“第三者的視点から自他相互の目標のために視点を協調させる段階”である (長峰, 1996; Yeates & Selman, 1989)。

また、INSモデルでは、上記の発達レベルの次元に加えて、対人的志向の次元が設定されている。対人的志向とは、対人葛藤に対処する際に、主として誰に向けて行為をするのかという方略のスタイルである。相手の要求を変えさせようとする場合は他者変化的志

向、自分の要求を変化させようとする場合は自己変化的志向となる。社会的視点取得能力の高まりと共に、この2つの対人志向スタイルは協調的志向へと統合される (渡部, 2000)。

ところで、柴橋(2004)によると、自分の気持ちや考えを言葉で表し、相手の発言も受け止めようとする対人関係のあり方は、青年期の重要な発達課題の一つであると考えられる。このような対人関係を可能にするには、自他双方の要求や視点を公平に捉え、双方の視点を調整して関係を大切にす、より発達した社会的視点調整能力に基づく対人交渉方略が必要になると考えられる。

対人葛藤解決においてより適切な対人交渉方略を実行できるかどうかには、様々な要因が影響すると考えられる。羅・堂野(2005)は、その一つとして信頼感をあげている。また、手塚・坂井(2007)は、高校生を対象に調査を行い、“信頼されている感”と“信頼している感”によって測定された親友との信頼感が、社会的スキルに正の影響を与えることを示した。山井・成田(2003)は、信頼感の不足は思春期・青年期の社会的不適応の要因である社会的情報処理の歪みと関連し、社会的行動に影響を及ぼす可能性が高いと考え、小学5, 6年生を対象として、葛藤解決方略のパターンによる信頼感の違いを検討している。その結果、自己への信頼と他者への信頼が同程度の方略パターンと、他者への信頼の方が自己への信頼よりも高い方略パターンがみられた。しかし、この他に対人交渉方略と信頼感との関係を実証的に扱った研究はほとんどなく、信頼感がINSモデルの4つのステップのどこに影響するのかがまだ明らかになっていない。そこで本研究は、青年期において、対人交渉方略と信頼感との関連を検討する。

対人交渉方略に信頼感が与える影響を推測する上で、自己表明の研究が参考になる。齊川(2008)の研究

では、大学生を対象に自己表明と信頼感の関係を検討している。その結果、自己表明をよくする人はあまりしない人に比べて、自己や他者への信頼が高いこと、女子では、自己表明をあまりしない人の方が不信が高いことが示された。また、柴橋（2004）の研究においては、高校生と中学生のいずれも、“率直さへの肯定感”が“自己表明”と“他者の表明を望む気持ち”の両方に正の影響を与えていた。柴橋は“率直さへの肯定感”は自分の気持ちや考えを大切なものとする自己信頼感と深く関わると考えており、自己信頼感が“自己表明”だけでなく、他者の様々な表明を受けとめようとする気持ちにも結びついていると述べている。また、柴橋（2004）においては、高校生の、特に女子では、自分の気持ちや考えを受けとめてもらえるという思いが“自己表明”と“他者の表明を望む気持ち”の背景にあることを示唆する結果もみられた。一方、中学生ではこうした結果がほとんどみられなかった。特に、“他者の表明を望む気持ち”に対しては、自分の気持ちや考えを受けとめてもらえると思っている程度は関連しないようである。

以上の齊川（2008）や柴橋（2004）の研究からは、自己や他者に対する信頼感の高い人は、相手に意見の表明を望み、かつ自分の意見も述べることができると考えられる。その結果、自他の要求と関係を考慮し、互いが共通の目標を見出そうとし、お互いがお互いの要求を協調的に変えようとする協調的な対人交渉方略をとることができるだろう。逆に、信頼感の低い人は、自己表明せず、自己と対人葛藤の相手の両者が、ともに要求を協調的に変えるような協調的方略による葛藤の解決は生じにくいだろう。ただし、中学生の場合は、自分の気持ちや考えを受けとめてもらえるといった他者への信頼感と対人交渉方略との関連は見られないか、見られたとしても自己への信頼感と対人交渉方略との関連よりも弱いと考えられる。

以上より、本研究では、中学生に注目し、信頼感が、INSモデルの各ステップに及ぼす影響を検討する。その際、自己への信頼感と他者への信頼感のそれぞれの影響をみていく。そのため、“人や自分自身を安心して信じ、頼ることができる気持ち”（天貝，2008，p. 17）というように、自己と他者の両方の方向性をもつものとして信頼感をとらえ、多次元的に測定する天貝（1995）の尺度を使用する。

## 方法

### 参加者

A県の公立中学校に通う中学2年生の男子49名、女子50名が調査に参加した。

### 質問紙

対人交渉方略のレベルを調べるための質問と、信頼

感尺度を1冊の冊子に綴じた質問紙を使用した。

**対人交渉方略** 対人交渉方略のレベルを測定するために、仮想の対人葛藤場面を呈示し、その場面での葛藤の解決に関して、主人公の立場からの回答を求めた。

対人葛藤場面は、山岸（1998）を参考に2場面作成した。登場人物は主人公のA君（さん）とその友人B君（さん）であり、場面はこの二者間の葛藤からなる。場面の内容をTable 1に示した。中学生において実際にこのような葛藤がありそうかどうかを、現職の中学校教諭に検討してもらった。

質問紙では、まず葛藤場面を一つ呈示し、次に、各ステップに対応する質問を呈示した。質問は渡部（1993）の手続きを参考に設定した。各ステップの質問の内容は以下の通りである。ステップ1（問題の定義）：“このエピソードの中で起きている問題は何かだと思いますか。また、どうしてそれが問題だと思いますか”；ステップ2（方略の産出）：“問題を解決するために、あなたがA君（さん）だったらどう行動しますか。まず頭の中で考えて下さい”（前半），“あなたの思いついた行動に近い選択肢を選び、○をつけて下さい”（後半）；ステップ3（方略の選択と実行）：“○をつけた行動や、‘その他’に書いた行動の中で、一番よいと思う行動の一つを選んで下さい”；ステップ4（結果の評価）：“選んだ通りに行動した場合、あなたがA君（さん）ならどのように感じますか。選択肢から一つを選んで下さい。なぜA君（さん）は選んだような気持ちを感じると思いますか”，“選んだ通りに行動した場合、B君（さん）はどのように感じると思いますか。選択肢から一つを選んで下さい。なぜB君（さん）は選んだような気持ちを感じると思いますか”。

ステップ1と2（前半）の質問は葛藤場面と同じページに印刷した。ステップ1の質問には、自由記述による回答を求めた。次に、葛藤場面とステップ1、2（前半）の質問が印刷されたページの裏ページに、ステップ2の後半の質問と対人交渉方略の選択肢を載せた。選択肢は山岸（1998）の研究を参考に作成した。Table 2

Table 1 対人葛藤場面の内容

場面1：A君（さん）のクラスは図書館で調べ学習をしていました。A君（さん）は調べたい内容が載っている本を見つけ、椅子に座って読んでいましたが、ノートを教室に忘れたことに気づき、本を図書館の机において少しの間席を離れました。ところがA君（さん）が図書館に戻ってくるとB君（さん）がその本を読んでいて、こわい顔で“今、僕（私）が使っているのだからあとにしてよ”と言いました。

場面2：A君（さん）のクラスでは調べ学習を発表することになりました。A君（さん）はB君（さん）と二人一組で発表します。1人は発表する係、もう1人は意見を黒板に書く係です。A君（さん）は人前で話すのが苦手なので、発表する係はやりたくないと思っていると、B君（さん）が“僕（私）は発表する係は嫌だな。A君（さん）やってよ”と言ってきました。

Table 2 対人交渉方略の選択肢

	選択肢	INSモデルのレベル
場面1	まったく行動が思いつかなかった。	
	B君(さん)から本を取り上げて読む。	0
	B君(さん)がおおるとこわいからあきらめる。	0
	“僕(私)が先に読んでいたのだからかして”と言う。	1
	B君(さん)のじゃまをしては悪いからあきらめる。	1
	“忘れ物をしてちょっと離れていたただけだ”と説明してかしてもらおう。	2
	“少し読んだら替わって”という。	2
	じゃんけんをして、どちらが使うか決める。	2
二人で一緒に使えないか考える。	3	
	先生を呼びに行く。	権威志向
場面2	まったく行動が思いつかなかった。	
	やりたくないで無理やりB(さん)君に押しつける。	0
	B君(さん)に怒られると嫌だから発表の係をやる。	0
	“B君(さん)こそ発表の係をやればいいじゃないか”と言う。	1
	B君(さん)がやれというから発表の係をやる。	1
	B君(さん)にやりたくない理由を説明する。	2
	なぜB君(さん)が自分に発表の係をやったのか、訳を尋ねる。	2
	じゃんけんをして、係を決める。	2
二人で話し合っって係を決める。	3	
	先生を呼びに行く。	権威志向

は各場面に対する対人交渉方略の選択肢と、各方略のINSモデルでの発達レベルをまとめたものである。なお、“じゃんけん”は渡部(1993)に倣い、レベル2とした。この表に示したように、1つの場面につき、全部で10個の方略がある。質問紙においては、方略をランダムに並べた。また、選択肢の中に参加者の思いついた方略がない場合の記述欄も設けた。同じページの下部に、ステップ3の質問を印刷した。そして、隣のページに最後のステップ4の質問を印刷した。ステップ4の質問で“その他”を選択した場合は、具体的な気持ちの記述も求めた。また、気持ちの理由に関しては、自由記述による回答を求めた。

**信頼感尺度** 前述のように、信頼感の測定には天貝(1995)の作成した尺度を使用した。尺度は“自分への信頼”、“他者への信頼”、“不信”の3因子から成り立っており、全24項目である。回答は“非常にあてはまる”、“あてはまる”、“少しあてはまる”、“あまりあてはまらない”、“あてはまらない”、“全くあてはまらない”の6件法で求めた。

**手続き**

調査は、2010年10月の授業後のホームルームの時間に実施した。3クラス同時の一斉調査であった。質問紙はクラス担任が配布し、校内放送を通じて調査実施者のペースで回答を進めていった。調査の最初に、どうしても答えたくない質問があれば答えなくてもよいことを伝えた。

まず、男性はA君、女性はAさんの気持ちになって答えるように教示し、場面1を読みあげた。次に、ステップ1の質問に対する回答を求めた。この回答のために3分時間をとった。3分後、読み上げた場面での対人交渉方略を考える時間を1分間とった(ステップ2の前半)。次に、調査実施者の指示でページをめくり、選

択肢の中から思いついた方略全ての選択(ステップ2の後半)と、最もよいと思う方略の選択(ステップ3)を求めた。最後に、ステップ4の質問への回答を求めた。この回答には1分半時間をとった。以上の手順を、場面2についても繰り返した。

対人交渉方略に関する質問に続けて、信頼感尺度を実施した。その際、調査実施者が信頼感尺度の項目を1つずつ読み上げた。1つの項目を読み終わってから、次の項目を読み始めるまでに10秒間時間をおいた。この間に参加者は、直前に読み上げられた項目に対する評定を記入した。

**結果**

教示全体を理解していなかった参加者や、回答に積極的ではなかった参加者6名のデータを、分析の対象から除いた。したがって、以下の分析は、男子45名(平均年齢(SD)は13.58(0.54)歳)、女子48名(平均年齢(SD)は13.48(0.50)歳)のデータに基づき行った。

**対人交渉方略**

**回答の分類** ステップ1と4の質問に対する自由記述の回答は、長峰(1996)の基準に従い、レベル0-3の4カテゴリーに第一筆者が分類した。ステップ3の質問に対して参加者自身が考えた対人交渉方略を回答した場合も、長峰(1996)の基準に従ってレベルを判断した。

なお、ステップ4の回答において、AとBの両者の気持ちとして“不満”を選択し、“(Aは)‘先に読んでいたのに’”という気持ちがある、(Bは)‘机においてあったじゃないか’”という気持ちがある”や、“自分(A)が忘れていなければ、B君ともめごとをせず

にすんだから、自分 (B) が読んでるとちゅうに声をかけられたから”というように、自他双方の視点から結果を評価していることをうかがわせる理由をあげた参加者がいた。こうした回答は、長峰 (1996) の基準 (Table 3参照) では分類が難しいと判断し、分類不能とした。

Table 3 ステップ4の分類基準

レベル0: 答えられない, 極端な解決。情緒的混乱を示すような解決。
レベル1: ある行動がおこることによる解決。一方的な自己利益, または一方的に譲歩した解決。
レベル2: 二人の視点が表現される。主人公と他者の両方が満足するか, 双方がなんらかの同意にいたったとき。
レベル3: 成功が良好な関係に基づき, 関係の維持・発展があったとき。

注) 長峰 (1996) より作成した。

**INS 得点** 対人交渉方略 (INS) 得点は、以下のようにして算出した。ステップ1, 3, 4はレベルの高さを得点とした。すなわち、レベル0であれば0, レベル3であれば3となる (“先生を呼びに行く”を選択した参加者はいなかった)。なお、ステップ2の質問に対して “まったく行動が思いつかなかった” を選択していた場合はステップ3の得点を0とし、ステップ2の回答において選択した方略以外の選択肢を一番よいと思う行動として回答した場合は、ステップ3の得点をつけなかった。また、ステップ4で分類不能に分類された場合は、ステップ4の得点をつけなかった。

ステップ2は得点を2つ算出した。1つは選択した方略の数である。なお、方略の選択肢を印刷したページの前ページに、葛藤解決方略を書き込んでいた参加者が数名いた。書いてある内容が選択肢にない場合は、その分を得点に加えた。以下、この得点をステップ2 (方略数) とする。もう1つは、参加者が選択した方略の中で最も上の段階のレベルの高さを得点とするものである。この得点はステップ2 (レベル) とした。

Table 4に場面別、性別の各得点の平均とSDを示した。場面1のステップ2 (方略数) の得点と場面2のステップ1の得点以外では、女子の方が平均値が高かった。場面別、得点別にt検定を実施したところ、場面2のステップ2 (レベル) の得点において、女子の方が男子よりも有意に平均値が高かった ( $t(91) = 2.05$ ,

$p < .05, d = 0.43$ )。

次に、各ステップのINS得点間のピアソンの積率相関係数を、男女こみ、男女別に求めた。ところで、ステップ2の回答において “まったく行動が思いつかなかった” を選択した場合、ステップ3の質問に対しては、印刷されている選択肢の中から一番よいと思う行動を1つ選ぶように教示していた。そのため、他の参加者とはステップ3以降の回答の質が異なると考えられる。したがって、ステップ3と4の得点間の相関係数を算出する際は、 “まったく行動が思いつかなかった” を選択した参加者のデータを除いた。相関係数をTable 5にまとめた。全体として、ステップ1と4、ステップ2の二つの得点、および、ステップ2 (レベル) とステップ3の得点間の相関係数に有意または有意傾向がみられた。また、女子の場面1を除き、ステップ2 (方略数) とステップ3の得点間の相関係数も、有意または有意傾向を示していた。場面2では、ステップ2のいずれかの得点とステップ4の得点の間の相関係数も有意であった。

**信頼感**

信頼感尺度の各項目で、 “非常にあてはまる” を選択した場合は5, “全くあてはまらない” を選択した場合は0と得点化した。次に、信頼感尺度の因子別に、欠損値のある参加者を除いてクロンバックの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、自己信頼因子 (6項目), 他者信頼因子 (8項目), 不信因子 (10項目) の順に .68 ( $N = 92$ ), .77 ( $N = 88$ ), .79 ( $N = 88$ ) となり、ある程度の内的一貫性が示された。そこで、信頼感尺度の質問項目を因子別に分け、各因子において平均値を求めた。欠損値のある参加者では、それ以外の項目の評定値を用いて平均値を算出した。以下、これらの平均値を自己信頼得点、他者信頼得点、不信得点とする。なお、信頼感尺度24項目中9項目の評定がなかった参加者1名については、信頼感の得点は算出しなかった。この参加者を除く92名の、各得点の性別の平均値とSDをTable 6にまとめた。

Table 6に示した信頼感の得点別に男女の平均値の差の検定を行った結果、自己信頼得点と他者信頼得点において、男子が女子よりも有意に得点が高かった ( $t_s(90) = 2.68, 2.05, ps < .05, ds = 0.58, 0.43$ )。

Table 4 場面別、性別の各INS得点の平均とSD

場面	性	ステップ1		ステップ2 (方略数)		ステップ2 (レベル)		ステップ3		ステップ4	
		平均 (SD)	n								
1	男	1.04 (0.76)	45	2.38 (1.10)	45	2.29 (0.81)	45	2.08 (0.92)	39	1.28 (0.78)	39
	女	1.27 (0.78)	48	2.29 (1.00)	48	2.48 (0.65)	48	2.29 (0.67)	42	1.46 (0.79)	37
2	男	1.56 (0.93)	45	2.13 (1.11)	45	2.18 (1.06)	45	2.21 (1.02)	39	1.40 (0.73)	42
	女	1.50 (0.74)	48	2.23 (0.94)	48	2.56 (0.70)	48	2.28 (0.68)	46	1.56 (0.59)	41

注) ステップ1, 2 (レベル), 3, 4の得点の取り得る範囲は0-3である。ステップ2 (方略数) の最大値は4であった。

Table 5 INSの各得点間のピアソンの積率相関係数

性	ステップ	場面1				場面2			
		ステップ2 (方略数)	ステップ2 (レベル)	ステップ3	ステップ4	ステップ2 (方略数)	ステップ2 (レベル)	ステップ3	ステップ4
全体	1	.04	.00	.02	.32 <sup>ab*</sup>	.21*	.08	-.00	.42 <sup>c*</sup>
	2 (方略数)		.53*	.20+	-.01 <sup>a</sup>		.59*	.39*	.28 <sup>c*</sup>
	2 (レベル)			.72*	.08 <sup>a</sup>			.88*	.35 <sup>c*</sup>
	3				.09 <sup>b</sup>				.20 <sup>d+</sup>
	N	93	93	81	76 (a) 64 (b)	93	93	85	83 (c) 74 (d)
男	1	.19	.12	.03	.34 <sup>ef*</sup>	.19	.12	.11	.44 <sup>g*</sup>
	2 (方略数)		.53*	.39*	.08 <sup>c</sup>		.59*	.41*	.23 <sup>g</sup>
	2 (レベル)			.79*	.24 <sup>e</sup>			.95*	.40 <sup>g*</sup>
	3				.15 <sup>f</sup>				.27 <sup>h</sup>
	N	45	45	39	39 (e) 31 (f)	45	45	39	42 (g) 35 (h)
女	1	-.10	-.17	.00	.28 <sup>i+</sup>	.26+	.02	-.16	.40 <sup>k*</sup>
	2 (方略数)		.56*	-.09	-.10 <sup>j</sup>		.62*	.36*	.33 <sup>k*</sup>
	2 (レベル)			.58*	-.19 <sup>j</sup>			.76*	.22 <sup>k</sup>
	3				.03 <sup>j</sup>				.08 <sup>l</sup>
	N	48	48	42	37 (i) 33 (j)	48	48	46	41 (k) 39 (l)

注) ステップ3と4の得点間の相関係数を算出する際は、ステップ2の回答において“まったく行動が思い浮かばなかった”を選択した参加者のデータを除いた。

+ $p < .10$ , \* $p < .05$ 。

Table 6 性別の信頼感の各得点の平均 (SD)

性	n	自己信頼	他者信頼	不信
男	44	3.05 (0.94)	3.33 (0.83)	2.53 (0.99)
女	48	2.59 (0.66)	3.01 (0.66)	2.53 (0.84)

注) 得点の取り得る範囲は0-5であった。

次に、INS得点の場合と同様に、男女こみ、及び、男女別に、自己信頼得点、他者信頼得点、不信得点の間のピアソンの積率相関係数を算出した。Table 7に示したように、男女こみ、男女別のいずれでも、自己信頼得点と他者信頼得点の間に、有意な正の相関係数が得られた。女子では全体に相関係数の値が低く、この他に有意な相関係数はみられなかった。男女こみ、および、男子においては、他者信頼得点と不信得点の間に、弱から中程度の負の相関係数が示された。また、自己信頼得点と不信得点の間にも負の相関係数がみられ、男女こみでは10%水準で、男子では5%水準で有意であった。

Table 7 信頼感の各得点間のピアソンの積率相関係数

	N		他者信頼	不信
全体	92	自己信頼 他者信頼	.71*	-.18+ -.35*
男	44	自己信頼 他者信頼	.75*	-.34* -.47*
女	48	自己信頼 他者信頼	.59*	.05 -.21

+ $p < .10$ , \* $p < .05$ 。

#### 対人交渉方略のレベルと信頼感との関連

INSモデルの各ステップにおいて、信頼感がどのように影響しているかを検討するため、自己信頼、他者信頼、不信の各得点を説明変数、各INS得点を目的変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)をINS得点別に実施した。INS得点の平均値の性差はステップ2(レベル)を除き有意ではなかったが、信頼感の得点の平均値や得点間の相関係数には男女による違いがみられたため(Table 6, 7参照)、以下の重回帰分析は、男女こみ、および、男女別の両方で行った。

重回帰分析に先立ち、各重回帰分析の目的変数と説明変数の間のピアソンの積率相関係数を算出した。結果をTable 8にまとめた。場面1では、不信得点とINSの得点との間に、有意な相関係数が複数みられた。ただし、ステップによって、あるいは男女によって、正負の符号が逆になっている。この他に男子では、ステップ1の得点と自己信頼得点との間の相関係数が有意であった。

場面2で相関係数が有意であったのは、男子の不信得点×ステップ4の得点のみであった。

重回帰分析の結果、男女こみ、男女別の全てにおいて、場面1のステップ3の得点を目的変数とし、不信得点を説明変数とする重回帰式が有意であった( $R^2s = .13$ ,  $ps < .05$ )。不信得点の標準偏回帰係数は、男女こみ、男子、女子の順に $-.36$ ,  $-.37$ ,  $-.36$  ( $t(78) = -3.37$ ,  $t(36) = -2.35$ ,  $t(40) = -2.43$ ,  $ps < .05$ )と、負の値であった。また、同じ場面のステップ2(レベル)を目的変数とし、不信得点を説明変数とする重回帰式も、男女こみと男子で有意または有意傾向を示した。 $R^2$ は男女こみ、男子の順に、 $.03$  ( $p < .10$ ),  $.13$  ( $p$

Table 8 INSの各得点と、信頼感の各得点とのピアソンの積率相関係数

場面	性	信頼感	ステップ				
			1	2 (方略数)	2 (レベル)	3	4
1	全体	自己信頼	.11	.04	-.07	-.02	.13
		他者信頼	.09	.06	.04	.07	.11
		不信	.00	.19+	-.18+	-.36*	-.06
		N	92	92	92	80	75
	男	自己信頼	.33*	-.01	.02	.11	.20
		他者信頼	.23	.02	.11	.14	.23
		不信	.03	.08	-.36*	-.37*	-.30+
		N	44	44	44	38	38
	女	自己信頼	-.06	.09	-.11	-.12	.11
他者信頼		.01	.09	.01	.06	.00	
不信		-.03	.34*	.05	-.36*	.24+	
N		48	48	48	42	37	
2	全体	自己信頼	.12	-.07	-.11	.01	.07
		他者信頼	.02	.03	.03	.13	.05
		不信	-.04	.01	-.10	-.12	-.10
		N	92	92	92	84	82
	男	自己信頼	.20	-.07	.03	.06	.08
		他者信頼	.06	.13	.15	.22	.10
		不信	-.15	-.14	-.18	-.19	-.31*
		N	44	44	44	38	41
	女	自己信頼	-.03	-.06	-.20	-.05	.14
他者信頼		-.05	-.09	-.04	.00	.03	
不信		.11	.19	.03	.00	.20	
N		48	48	48	46	41	

+ $p < .10$ , \* $p < .05$ 。

<.05), 標準偏回帰係数はいずれも負の値で,  $-0.18$  ( $t(90) = -1.76$ ,  $p < .10$ ),  $-0.36$  ( $t(42) = -2.48$ ,  $p < .05$ )であった。また, 男子では, 両場面において, ステップ4の得点を目的変数とした場合も, 不信得点を説明変数とした重回帰式が有意傾向, または有意であった(場面1, 2の順に $R^2$ は.09 ( $p < .10$ ), .10 ( $p < .05$ ))。そして, 標準偏回帰係数は $-0.30$  ( $t(36) = -1.86$ ,  $p < .10$ )と $-0.31$  ( $t(39) = -2.07$ ,  $p < .05$ )と, 負の値であった。

一方, 場面1では, ステップ2 (方略数) を目的変数とした場合にも, 男女こみと女子において, 不信得点を説明変数とする重回帰式が有意または有意傾向を示したが ( $R^2$ は.04 ( $p < .10$ )と.11 ( $p < .05$ )), 標準偏回帰係数は.19 ( $t(90) = 1.86$ ,  $p < .10$ ), および, .34 ( $t(46) = 2.41$ ,  $p < .05$ )と, 正の値であった。

この他に, 男子では, 場面1のステップ1の得点を目的変数, 自己信頼得点を説明変数とする重回帰式が有意であった ( $R^2 = .11$ ,  $\beta = .33$  ( $t(42) = 2.30$ ),  $p < .05$ )。

重回帰分析の結果を以下に簡単にまとめる。まず, 不信得点の有意な影響が, 複数のステップで示された。ただし, 影響の方向がステップによって異なり, 男女ともに, 場面1のステップ3の得点に対しては負の影響が, また, 男子の場合は, 同じ場面のステップ2 (レベル) の得点や, 場面1, 2のステップ4の得点に

も, 負の影響がみられた。しかし女子では, ステップ2 (方略数) に対する正の影響が有意であった。不信得点の他には, 自己信頼得点の正の影響が, 男子の場面1, ステップ1の得点に対してみられた。

ところで, Table 5のステップ2 (レベル) とステップ3の得点間の相関係数からは, 必ずしも, 思いついた方略の中で最も高いレベルのものが, 実行する方略として選ばれるわけではないことが示唆される。ステップ3の得点からステップ2 (レベル) の得点を引いた値 (以下, ステップ3と2の差得点とする) を算出すると, 場面1, 2の順に男子の平均 ( $SD$ ,  $n$ ) は $-0.23$  (0.58, 39),  $-0.13$  (0.33, 39), 女子の平均 ( $SD$ ,  $n$ ) は $-0.33$  (0.56, 42),  $-0.33$  (0.47, 46) となり, ステップ間で得点にずれがみられた。

そこで, 思いついた方略の中で, より高い方略を実行する方略として選択するかどうか, 信頼感が及ぼす影響を検討するため, ステップ3と2の差得点を目的変数, 信頼感の3つの得点を説明変数とする重回帰分析 (ステップワイズ法) を実施した。目的変数と説明変数の間の相関係数を Table 9にまとめた。男子においては有意な相関が全くみられなかった。

分析の結果, 女子の場合は, 場面1において不信得点を説明変数とした重回帰式が有意となった ( $R^2 = .11$ ,  $\beta = -0.34$  ( $t(40) = -2.25$ ),  $p < .05$ )。また, 男女こみ

Table 9 ステップ3と2の差得点と、信頼感の各得点とのピアソンの積率相関係数

性	信頼感	場面1		場面2	
		r	N	r	N
全体	自己信頼	.11	80	.19+	84
	他者信頼	.06	80	.15	84
	不信	-.16	80	-.11	84
男	自己信頼	.12	38	-.03	38
	他者信頼	.04	38	-.03	38
	不信	-.01	38	-.13	38
女	自己信頼	.06	42	.28+	46
	他者信頼	.05	42	.23	46
	不信	-.34*	42	-.10	46

+ $p < .10$ , \* $p < .05$ .

と女子では、場面2において自己信頼得点を説明変数とする重回帰式が、10%水準で有意であった ( $R^2$ は、男女こみ、女子の順に.04, .08)。標準偏回帰係数は.19 ( $t(82) = 1.76, p < .10$ ), .28 ( $t(44) = 1.94, p < .10$ )と、正の値であった。

### 考察

本研究の目的は、信頼感が、対人交渉方略における社会的問題解決プロセスの各ステップに及ぼす影響を、検討することであった。

まず、Table 4の各INS得点の平均をみると、性差はほとんど有意ではなかった。先行研究では、女性の方が対人交渉方略の得点が高くなるという結果が示されている (たとえば、渡部1993; 山岸, 1998)。本研究の結果においては、場面2のステップ2で選択した方略の最高レベルのみ、同様の性差が示された。ただし効果量は小さかった。また、必ずしも思いついた中で最もよい方略を選択するわけではなく、ステップ3において性差はみられなかった。この結果は、対人交渉方略における性差は、状況によって見られなくなる程度の弱いものである可能性を示唆する。

信頼感の得点 (Table 6) をみると、女子は男子よりも自己信頼と他者信頼の得点が低かった。また、Table 7に示したように、男子では信頼感の得点間の相関係数は全て有意であったが、女子は自己信頼得点と他者信頼得点の間の相関係数のみ有意であった。

以上のように、男女の違いがみられたため、対人葛藤解決のレベルと信頼感との関連に関する分析も、男女別に行った。その結果、男女共に、場面1のステップ3の得点に対する不信得点の負の影響が示された。この結果からは、“地位や立場が変われば、私自身も今とは全く違う人間になるだろう”、“私はなぜか人に対して疑い深くなってしまふ”など、自己や他者に対する不信感が強いと、実行する方略として、協調的に葛藤状況を解決できるような対人交渉方略を選択しにくく

なると推測される。男子では両場面のステップ4においても不信得点の負の影響が有意であった。したがって男子の場合は、社会的問題解決プロセスの複数のステップにおいて、自己や他者に対する不信感が、協調的で自他の両方が満足し、良好な対人関係が維持されるような解決を妨げるような影響をもたらす可能性が考えられる。

一方、女子では、場面1のステップ2に対する不信得点の正の影響が有意であった。この結果は、自己や他者への不信感が強いと、葛藤状況では不安を感じ、いくつもの方略を考えては否定するような状態になっていると解釈することも可能であろう。ただし、前述のように、同じ場面のステップ3では、不信感の負の影響を及ぼしていると考えられる。このようにステップによって不信得点の影響の方向が反対になったのは、なぜだろうか。女子では、場面1のステップ2 (方略数) とステップ3の得点の相関係数は有意ではなく (Table 5)、ステップ3とステップ2 (レベル) の差に対する不信得点の負の影響が有意であった。これらの結果を合わせて考えると、女子の場合、自己や他者への不信感が高いと、いくつもの方略を思いつくが、思いついた方略の中で最もレベルの高い方略を選ばず、より低いレベルの方略を選んでしまう傾向があると推測される。

したがって、本研究の、特に場面1における結果は、信頼感が高いほど協調的な方略をとるという予測を間接的に支持するものと考えられる。

また、前述のように、柴橋 (2004) の研究からは、中学生では、自己への信頼感にINSの得点に正の影響を与え、他者への信頼感よりも影響が強いという結果が予測された。男子では場面1のステップ1の得点に対して、女子では場面2のステップ3と2の差得点に対して、それぞれ自己信頼得点の正の影響がみられたことは、この予測と一致する結果といえよう。不信得点の影響と合わせると、男子の場合は、自己に対する信頼感が高いほど、葛藤状況を“本を取られた”、“嫌な係を押しつけられた”などは受け取らず、自他両方の側面から問題を認識し、自己や他者に対する不信感が低いほど、より協調的な方略を思いついて、その方略を行動に移すと考えられる。また、女子においては、自己に対する信頼感が高いと、不信感の影響とは逆に、思いついた方略の中で、より低いレベルの方略を選んでしまう傾向は抑制されると考えられる。ただし、不信感に比べると自己への信頼感の影響が示されたステップが少なかった。中学生においては、信頼感の中で、自他への不信感というネガティブな側面の影響が広範囲にわたるものである可能性が示唆される。これは、思春期の頃の身体発達や認知発達、そして、自己の発達に伴う不安や自己内外の葛藤の影響によるものなのかもしれない。

ところで、中学校の学習指導要領における道徳の内容項目には、“それぞれの個性や立場を尊重し、色々なものの見方や考え方があることを理解して、寛容の心もち謙虚に他に学ぶ”というものがある。同様に、小学校第5学年及び第6学年の段階では、“謙虚な心もち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切に”という項目がある（“小学校学習指導要領解説 道徳編”（文部科学省，2008），“中学校学習指導要領解説 道徳編”（文部科学省，2008）参照）。しかし、Table 4をみると、ステップ1や4の平均値は2よりも低い。本研究では、仮想的対人葛藤場面を用いていたため、登場人物の人間関係を具体的に想像するのが難しかった可能性もある。しかし、少なくとも中学2年生でも、場面の内容によっては、自他の両方の視点に立って状況を理解し、その内容を自発的に言葉で表現するということが、難しい場合もあると考えられる。

したがって、道徳の授業などで、仮想場面を利用する際には、児童生徒が言葉で表現していなかった視点について明示的に説明することも必要ではないだろうか。この他に、もっとよい方略を思いついていなかったか、結果を考えるとどの方略を実行するのがよいのか等、ステップ間のつながりを意識させるような働きかけも有効かもしれない。また、こうした活動においては、他者の視点や立場を理解させるだけでなく、それぞれの児童生徒の自分自身に対する信頼感や、自他に対する不信感に目を向けることも忘れてはならないだろう。

なお、重回帰分析の結果において、重決定係数の値は.03から.13と、高くはなかった。また、場面による違いもあった。したがって、対人交渉方略における問題が、信頼感を高めることのみによって全て解決するわけではないことは、言うまでもないことである。また本研究では、他者への信頼感の対象として、一般的な他者を想定していた。しかし、特定の他者に対する信頼感と、その他者との葛藤における対人交渉方略は、一般的な他者への信頼感や対人交渉方略とは異なる可能性がある。この点について検討することは今後の課題の一つである。

## 引用文献

- 天貝由美子 (1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, **43**, 364-371.
- 天貝由美子 (2008). ひとへの信頼感はどのように育つか 児童心理, **62** (1), 17-23.
- 羅 蓮萍・堂野佐俊 (2005). 社会的問題解決に関する発達心理学的研究——日本における研究の動向—— 研究論叢 (芸術・体育・教育・心理) (山口大学教育学部), **55** (3), 171-187.
- 文部科学省 (2008). 小学校学習指導要領解説 道徳編 東洋館出版社
- 文部科学省 (2008). 中学校学習指導要領解説 道徳編 日本文教出版

- 長峰伸治 (1996). 青年期の対人的交渉方略に関する研究——INSモデルの検討と対人的文脈による効果—— 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学), **43**, 175-186.
- 大淵憲一 (1996). 攻撃性と対人葛藤 大淵憲一・堀毛一也 (編) パーソナリティと対人行動 誠信書房 pp. 101-122.
- 大西勝二 (2003). 職場で発生する対人葛藤時に使用する方略に関する研究——統制力と課題の重要性の及ぼす影響 (2)—— 経営行動科学, **17**, 77-83.
- 齊川恵美子 (2008). 自己表明と信頼感の関係について 臨床教育心理学研究 (関西学院大学), **34**, 92.
- Selman, R. L., Beardslee, W., Schultz, L. H., Krupa, M., & Podorefsky, D. (1986). Assessing adolescent interpersonal negotiation strategies: Toward the integration of structural and functional models. *Developmental Psychology*, **22**, 450-459.
- 柴橋祐子 (2004). 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究, **52**, 12-23.
- 手塚知子・酒井厚 (2007). 高校生の親友関係と学校適応——学校内外の親友との信頼感の比較から—— 教育実践学研究 (山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター), **12**, 70-81.
- 渡部玲二郎 (1993). 児童における対人交渉方略の発達——社会的情報処理と対人交渉方略の関連性—— 教育心理学研究, **41**, 452-461.
- 渡部玲二郎 (2000). 社会的問題解決能力の発達 堀野緑・濱口佳和・宮下一博 (編著) 子どものパーソナリティと社会性の発達——測定尺度つき—— 北大路書房 pp. 188-201.
- 山岸明子 (1998). 小・中学生における対人交渉方略の発達及び適応感との関連——性差を中心に—— 教育心理学研究, **46**, 163-172.
- 山井絵里奈・成田健一 (2003). 葛藤の表現からみた子どもの信頼感——児童期の対人葛藤場面における葛藤解決方略と信頼感・攻撃性の関連—— 東京学芸大学第1部門, **54**, 137-147.
- Yeates, K. O., & Selman, R. L. (1989). Social competence in the schools: Toward and integrative developmental model for intervention. *Developmental Review*, **9**, 64-100.

## 付記

調査に参加して下さった中学校の皆様へ深く感謝致します。

(2012年9月14日受理)